

「国際理解とは」 関西学院大学一年 中村文乃

私はごく一般の女子大学生です。平日は電
 車に揺られて学校まで通い、休みの日にはア
 ルバイトをして小遣いを稼いでいます。学校
 帰りに友人達とイタリアニを食べて、スタ
 バックスのコーヒをすすりながら課題のレ
 ポートを書いたりします。当たり前前の様に過
 ぎていく毎日。しかし、これら全てが世界の
 目からすれば全然当たり前ではないのです。
 私は今日、大学の国際理解という授業で、フィ
 リピンという国について学びました。フィリ
 ピンと日本は、とても深い繋がりがあること
 を知りました。どのスーパーにも積まれている
 バナナ。バナナは安価な値段で売られています
 すし、一時はダイエット食品としてもブーム
 が巻き起こるほど、日本では人気の果物です。
 皆さんは、このバナナの多くがフィリン産だ
 といふことを知っていましたか。このバナナ
 は、フィリン南部のミンダオ島にある大き
 なプランテーションで栽培されているのです。
 一五六五年、フィリンはスペインの植民地で

した。一八九八年にはアメリカが代わってフィ
 リピニを植民地として、日本も三年半の間植民
 地として支配しました。三年半の間で百万人
 が犠牲になつたといわれています。この様に
 苦しい歴史が背景にあるフィリピンですが、ど
 うしてバナナをこれほど栽培し、日本に輸出
 しているのでしょうか。日本はフィリピンから
 バナナを輸入する前は、台湾からのそのほとん
 どを輸入していました。台湾からの輸入が減
 少した背景として季節によつて供給量に限界
 があつたことなどがあげられています。その
 ときにアメリカが日本向けバナナ栽培のプラ
 ンテーションをフィリピンに作りはじめまし
 た。また、チキータヤドル、デルモンテなどの
 アグリビジネスもフィリピンに上手く話を
 しかけて、本来はほとんど手入れをしなくて
 も栽培することができていたバナナの品種を
 変え、強制的に日本へ輸出するためのバナナ
 を栽培させて口つたのです。土地を失つたフィ
 リピンの人々は、アグリビジネスが開拓し

た土地で働くか、失業者となることしかでき
ませんでした。毎朝六時から働き続けました。
かなりの重労働であるのに、一日の給料は約
百ペソ、日本円にするとしたら、たの七百円なの
です。フィリピンで六人家族の世帯が一日生活
するのに必要なお金は二百ペソといわれてい
るので、とても厳しい待遇だということが分
かります。また、栽培過程には様々な農薬が
使われました。農薬によって皮膚がただれて
しまった人、病気にかかってしまった人もい
るので、バナナ農園で働く人々は、辞めた
くても、家族の為や自分の為に辞めることが
許されないのです。

私はこの事実を聞いて衝撃を受けました。
そして、私が本当に贅沢な暮らしをしていた
ことを実感しました。ダイエツトを頑張っ
たり、寒い日にこたつに入ってお昼寝をし
たり、学びたいことを学べることに、その全て
がバナナ農園で働く人々からすると夢のよう
なことなのです。そこで私はとても複雑な気

持ちになつたのです。自分の気持ちの中に、この人達は本当に可哀想、私に出来ることは何かあるのだから、と同情する自分と、私がこの人達にできることは何も無い、と残酷な自分がいたからです。そのときに私は気づきました。本当の意味での国際理解とは、ただボランティアを助をすることだけではなく、様々な国の知識を深め、自分達の生活が沢山の国や人々の犠牲の上で成り立っているという事実を理解することだと考えました。

授業の最後に先生は、「私達は事実を知ることで苦しくなるけれど、その苦しさには耐えないとフィリピンで働く方々が幸われない」と言ってくれました。私は今、この事実を知れたことをとても嬉しく思っています。私は今日フィリピンのことしか学びませんでした。これからもっと沢山の国を知っていきたくて思っています。その過程で、共に生きる社会をつくるために私たちができることを更に見つけていきたくて考えられています。